



【基調シンポジウム】

「阪神・淡路大震災の経験を人と動物の幸せな未来へ
— 護るべき大切な日常とは? 」

座長 あいさつ

位田 隆一 氏

京都大学 名誉教授／同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科 特別客員教授／同志社大学生命倫理ガバナンス研究センター長／公益財団法人 国際高等研究所 副所長

○司会 引き続きまして、基調シンポジウムに入らせていただきます。

私どもが震災に遭いましたときに、必ず出てきますのが日常を取り戻すという話です。そして、日常を守らなければならないということを私たちはいつも言います。そのために、たくさんの方が多くの労力を傾けまして、努力をいたしております。

しかし、では私たちが本来守るべき大切な日常はどんなものなのでしょうか。私たちはどんな日常を守っていけばいいのでしょうか。そういう疑問がこの 20 年の節目に私たちのところに湧いてまいりました。

それについて、毎回この基調シンポジウム、基調講演はすばらしい先生方をお迎えしておりますが、今回は 20 年記念ということで 4 名の先生方、そしてすばらしい座長の先生をお迎えして開催させていただきたいと思っております。

御紹介いたします。座長の位田隆一先生、京都大学の名誉教授、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科特別客員教授、同志社大学生命倫理ガバナンス研究センター長、公益財団法人国際高等研究所の副所長でいらっしゃいます。位田先生にこれから座を回していただきたいと思っております。

位田先生、よろしく願いいたします。

○位田 おはようございます。

この基調シンポジウムの座長を仰せつかりました同志社大学の位田でございます。

本論に入る前に少し提案がございます。この建物は神戸大学の施設でございまして、国立大学法人は 28 度以下にエアコンの温度を下げてはいけないというのが一般的なルールです。まだ、今は暑さがましですけど、これから暑くなると思いますので上着をとっていただいて、ネクタイを外していただくこともお許しいただくということで、このシンポジウム以降、お願いしたいと思います。私もネクタイを外します。

気楽にやるのがより自然だと思いますので、よろしく御協力お願いします。

私は、今は京都に住んでおりますけれども、震災前、もう 24 年ぐらい前だったと思っておりますが、夙川に住んでおりました。私の家内と子供 1 人、それからおばあちゃんと 4 人で夙川に住んでおりました。私どもの家族は震災の前に京都に移りましたので、私たちは被害を受けておりませんが、おばあちゃんが住んでいた家が全壊しました。震災直後に西宮北口からトコトコ歩いて夙川まで行っておりました。そのときに感じたのは、被害の大きさはもちろんのことながら、犬とか猫がうろうろ歩いているんですね。何となく帰る家とか、もしくは甘える家族を探しているような雰囲気でした。

それからその後も震災の跡を感じていました。実は阪神間の空は瀬戸内海があるのでキラキラ輝くんですね、海に反射した太陽の光があります。京都にいますとそういう、大きな海がないので、琵琶湖はありますけれど、キラキラ光り輝く青い空というのとは少し違うんです。



ところが、震災から何カ月か、ひょっとすると1年以上だったかと思えますけれども、神戸を通るたびに感じたのは、あの青い輝く空がなくなった。何かこう、もやがかかっているような、粉じんがまだ残っているような、そんな感覚をずっと持っておりまして。要するに、この神戸、阪神・淡路地区では自然の一番大きな存在である空もなくなってしまったんじゃないかという感じを持っておりまして。

きょうはちょうど阪神・淡路大震災から20年がたちまして、あのときには、自然の威厳と威力、それから生命の尊さを感じるとともに、そこに住んでいる我々家族、さらに我々家族を取り巻いている犬、猫、そのほか家畜たち、動物だけではなくて、植物、草花、それから昆虫、といった一つ一つの花や草、虫たち、こういったものも含めて人と自然と動物とが共生をしていく必要を本当に肌身で感じたと思えます。

この20年、ちょうど成人式を迎えると言ったほうがいいかもしれませんが、私たち自身がこの20年の時間を振り返って、もう一度、私たち自身と周りの動物、そして自然といったものを考え直してみよう、というのがこの基調シンポジウムの基本的なコンセプトと申し上げていいのではないかと思います。

私たちは、震災があるとよく「復興」と言います。しかし我々が考えているのは、元の生活に戻るのではなくて、むしろ新しい自然の中の人間生活というものの始まりであろうかと思えます。

そういう観点から、きょうは3名の先生それぞれから、まず同志社大学の小原先生には、人間、動物、自然の間の公共性という観点から、それから長崎大学の篠原先生には、脳科学から見た家族愛という観点、それから宮城大学の森本先生からは、生命の柔軟性という観点から、基調報告をいただきます。

その上で、少し進行のことも申し上げたいのですが、3人の先生方からそれぞれ、およそ30分程度お話をいただいて、一旦休憩をとらせていただきます。その後、3人の先生方で少し意見交換をしていただいて、それから余った時間をフロアに投げかけますので、御意見なり御質問なり、この3人の先生方とともに議論をし、考えてきたいと思えます。それが我々の20年を経た我々の基調のシンポジウムのやり方であろうかと思えます。